

時々落ちて怪俄なきは何か地面に着くときに上方に足もて地を蹴て飛び上がる等のことをなすものか不思議に怪俄なきは如何といふに武田中尉苦笑して「いや機の破損せざる限り落ちるにはあらず操縦して降りるなり」と。成る程落ちるにはあらずして降りるものならん。それより格納庫にて飛行機の實物について説明を聞き飛行船及水素發生装置等を參觀し飛行場を過ぎりて木村徳田二中尉の紀念塔に向ひ此處にて晝の辨當を開き二時の汽車にて歸途につきぬ。

採集日記

九月廿四日。理科二部四學年生蒲田大森から新田村邊に昆蟲の採集を爲す新田神社にて留學生鄭氏は記念の撮影をなし何れも最後の採集として心残り多く夜に入りて歸京す。

九月廿六日。理科二部三學年蒲田から目黒邊に昆蟲採集を試む本日は風暴くして甚だ不結果なりし。

十月三日。理科二年生池上から目黒邊に昆蟲採集に行く。

十月十日。理科一部三年生大宮に昆蟲採集に行く此日ミツカドコホロギを活きたる儘に多く採集し歸る二

ヶ月に垂んとする迄美しき聲にて鳴き居たり。
九月十九日。理科一年生吉祥寺より井頭辨天高井戸方面に植物を採集したり。

九月廿四日。理科一部三年生及び理科二年生は高尾山に植物を採集せり。

十月九日。理科二部四年生大日本ビール會社を參觀したり。

十月十日。家事科一年生蒲田より池上本門寺に至り其途中の植物を観察す。

十月十七日。理科一年生は鴻之臺に植物採集に行く。

富士登山

理科二部四年

七月十二日。登山の第一日

午前五時廿五分飯田町驛より汽車に乗る。矢部沼野兩先生御引率のもとに行を共にするもの九名初めの程は曇り模様なりしも次第に朗明雲霧を披きて青天をみるに至れり一行の楽しみは一入なり。

行く行く小佛峠の隧道を経て左方に桂川の深き水蝕谷を望みつゝ猿橋に達すれば所謂富士熔岩の一流は實にこの地に至り居り水流の爲め侵蝕せられて夫の著明

なる深潭を形成せるをみる。
九時大月下車、額に黒む煤烟の汗を拭ひつゝ、驛を出て一茶亭に憩ふ。

こゝより馬車を驅り谷村を経て吉田に至る大月附近にはかはらまつば、みぞほゝづき、ふぢうつぎあり多少山地の趣をなす。

大月附近の小流にはおらんだがらし多し。

吉田に至るまでは、うつぎ、うりかへで、しもつけ、ぎぼうし等の如き普通の品種にすぎず流水の中にはうめばらもの白花を綴るを見る。

馬車は進み景は次第に遷り富士の美容は吾等一行を迎へて眼前に近づきぬ。

午後一時半には吉田驛なる刑部旅館に投ずこゝを今宵の宿舎と定め晝食を終り裾野に採集せんとて出で鬱蒼と茂れる森の中に入る淺間の社なり樹の太さは二抱も三抱もありまた雙行の燈籠一道の蹊路苔滑にして石爛るこの社を中心として採集す。

午後六時再び刑部旅館に歸るそれより當日の植物の整理をなし入浴と食事とを終り床につく。

採集せる主なる植物をあぐれば次の如し。

羊齒類。

コケシノブ(苔葱科)

イムデンダ、クジャクシダ(水龍骨科)
單子類。

カシメダ(莎草科)

シホデ(百合科)

双子類。

カラハナサウ(桑科)

ナンバンハコベ(石竹科)

マツブサ(木蘭科)

イカリサウ(小蘗科)

カウモリカヅラ(防己科)

ヤマタネツケ、ヤマハタザラ(十字花科)

ミナモトサウ、マメザクラ、ウジコロシ、クサイチゴ
(薔薇科)

コアデサキ(虎耳草科)

ドクウツギ(毒空木科)

クロウメモドキ(鼠李科)

トチバニンジン(五加科)

ムヘドクサウ(馬鞭草科)

カハラマツバ(茜草科)

ミヤマウグヒスカグラ(忍冬科)

ボロギク、ヲタカラカウ(菊科)

第二日 七月十三日 晴天

紫雲たなびく雲間より霞の裾を長く引く秀麗なる富士の雄姿を仰ぎ勇氣百倍して宿を出づ吉田神社に詣りて[稜ひ給へ、清め給へ]の祈の言の葉心の奥迄清く響き渡る。

裾野は馬に乗りて行く此のあたり一帯は目をさへさるべき大木なき廣野原にして、只しもつけ、うつぎ等の花盛にして、其の間にのほなしようぶ、きすげ、むらさき、ぎぼうし等とりどりに散在す此の間凡そ三里馬返しにつく。

馬返しよりは所謂深林帯にして、まつ、つが、たうひ、もみしらびそ、等密林をなし、又からまつ、すぎ、かや、いぬがや、が、こめつが等を見る其の下にはのりうつぎ、はなひりのき等の灌木あり、とりあししようまつ、まとりさう、いちやくさう等白花の綴るを見る四合目に至れば、たかねばら有りしやくなげ點在して花後の姿を止む。

五合五勺に至れば此地は謂ゆる天地の境にして、我等一行も雲上人を氣どりて天上の人となりぬ、此處よりは灌木帯にして、最早や針葉樹は影もなし、しやくなげ、いはやなぎ等花盛りにて、はんのきは著しく矮小になり其の下にべにいちやく、いはかみ、ふじはたざを、いははたざを等紅白の花其の美を競ふ、をにく、ひめはなわらび、亦存す。

六合目に至れば灌木帯は既にすぎで草本帯に入る。

岩累々と堆積して、一步々々ふみしめて上る、其の間に、おんたて、ふじはたざを、いははたざを等の白花點在するに過ぎず。

六合五勺に至れば依蘭苔、いはひげ、いはつめくる等僅かに存在するのみなり。七合目に宿る。

今日採取せし重なる植物は次ぎの如し。

吉田……馬返

きすげ(百合科) うつぎ(虎耳草科)

しもつけ(薔薇科) むらさき(紫草科)

むしやりんど(唇形科) かひじんと(唇形科)

馬返……五合五勺に至る

もみ(松柏科) しらびそ()

つが(松柏科) しめつが()

たうひ() からまつ()

かや() いぬがや()

あぶらしば(莎草科) たかねすげ()

くろぼしさう(燈心草科) たけしまらん(百合科)

つばめおもと() まひづるさう()

くるまゆり() えんれいさう()

きそちどり(蘭科) ちどりさう()

ほざき一葉らん() ほざき無葉らん()

はんのき(樺樹科) やまはんのき()

やはづはんのき(#) だけかんば(樺樹科)
 やしやぶし(#) つのはしばみ(#)
 くましで(#) いぬしで(#)
 みやまはんしょうづる(毛茛科) からまつさう(#)
 あきからまつさう(#) るゐえふぼたん(小蘗科)
 やまはたごを(十字花科) たまあぢさゐ(虎耳草科)
 だいもんじさう(#) うめばちさう(#)
 なゝかまど(薔薇科) みやまなゝかまど(#)
 まめざくら(#) しろばなへびいちご(#)
 ごよういちご(#) きいちご(#)
 うらじろのき(#)
 やはずさう(萱科)
 まつかせさう(芸香科)
 うりかへて(槭樹科) はうちはかへて(#)
 こはうちはかへて(#) またたび(獼猴桃科)
 はないかだ(五加科)
 いはせんとうさう(繖形科)
 さらさどうだん(石南科)
 いちやくさう(鹿蹄草科) こいちやくさう(#)
 まるばいちやく(#) ぢんよういちやく(#)
 べにばないちやく(#) つとまりさう(櫻草科)
 りんどう(龍膽科) つるりんどう(#)

っりかねにんじん(桔梗科)
 みやまおとこよもぎ(菊科) かにかうもり(菊科)
 こばの依蘭苦
 ひめはなわらび(羊齒類)
 いはやなぎ(楊柳科)
 みやまはんのき(樺樹科)
 おんたで(蓼科)
 いはつめくさ(石竹科)
 いははださを(十字形科) ふじはださを(#)
 もめんづる(萱科)
 しやくなげ(石南科)
 べにばないちやく(鹿蹄草科) いはかいみ(#)
 こいはかいみ(#)
 こけもい } 石南科
 いはひげ }
 おにく(列當科)

七月十四日 晴天

石室の夜は想像した程苦しくはなかつたのみは居た
 が眠れぬ程でもなかつた一睡して目覺めた時は午前四
 時、そつとぬけ出して寒さを忍んで戸の外に佇んだ下を
 のぞめば白雲呎尺の間に重疊して下界を斷つて居るあ
 の雲の下では人間と云ふ動物が生活に追はれて日夜醒

靨して其安きを知らぬのである氣の毒のことであると
 已れば天上人になりすまじて(瞑想から瞑想にまけつて
 居るといつのまにか東の空に薄ぼら色の雲が一寸も
 曳いて其のぼら色の雲は秒一秒と濃くなり廣くなつた
 富士は今眠りより醒めんとして居る(この色が雲の海に
 うつり曉の暗は追ひはらはれ紅の曉の足の間から眞紅
 の太陽は顔を表はしたこれが富士の御來迎で人々の崇
 拜する大自然の靈である。竹串に(さし灰に立て、薪火
 で焼き焦した登山餅で朝食をすませた不味いのはも
 よりであるがこれも山中の風味、話の種に充分味つた。
 しつかり身仕度をして一夜の宿りに別れをつげた足を
 没する焼砂地を一進一退しつゝ六根清淨のかけ聲に岩
 根をふみしめながら登り登りて八合目に達す、これより
 上が難所こゝまでいやめる人もたまたまあると合力は
 云つた、わがクラスにはそんな弱むしは居ないと力んだ
 しかし難所ほどあつて一步一喘の苦しみを感ずる、此の
 登山で唯一の恐ろしいものゝ様に云ひなす胸突八丁に
 かゝりてはおほかたの人は弱つた様にみえた、然し頂上
 は目の前である、みなこれに勇氣づけられて一途に躍進
 して雲井の外の人となつた、此の時の愉快、到底たとへる
 ものがない常にあこがれて居た富士の高嶺、千山万水は
 皆脚下に額きて十三州の國は指す杖の尖に小さい實に

快哉の連發、長嘯すれば聲百里の雲に響き下界の雷にな
 りさうに思もはれる、先づ室に入り金明水で製つた牡丹
 餅と甘酒とを食ひ一寸足を休めそれから成就が岳の頂
 きに登つた噴火口は直徑十三町其周圍に聳立する八嶺
 の頂を巡るのを外輪巡と云ひ噴火口の縁をまわるを内
 輪巡りと云ふ他の一行はこの外輪巡りをやつてゐたが
 わが一行は時間の都合があるし他に目的があるのでお
 鉢巡りはよし、口は深さ千尺底には千古不消の雪を藏
 し雲霧靈あるものゝ如く湧き起りて神秘の奥を窺ふ事
 を許さぬ、眼を展すれば峻遠參勢の長汀曲浦遙々雲烟隠
 れに北は筑波、日光淺間の山嶺起伏波のうねりの如く連
 り富士沼山中湖、西湖は盆水の如く白く輝き群山の間を
 曲折する諸川は銀線の如く細く山腰に迫る東海は水天
 一碧として眼界はてしもなく展開されて居る唯遺憾に
 おもはれたのは足柄愛鷹山が白雲に覆はれて見るこ
 とが出来なかつたことである、しばらくして成就ヶ岳の
 方に廻る白烟微に脚下に騰り鞋底に熱氣を感ず、富士は
 こゝに火山の名残りを止めて居る、附近には噴出岩の形
 おもしろいものがある皿の形をしたもの、鏗節
 の形をしたもの、それぞれ拾ひ取つたあまり慾深をする
 とかへりが大變なので大概でよし、こんな山の上まで
 自然の制裁があるのをうらめしく思つた、石室にかへり

先生にこつそり大方のものが雲をたべた、富士山頂の雪壽命が延びるかもしれないとおもつて一度ならず喰べた、冷い雪水に蘇り元氣新らしく下山のの道についた、石室の前から砂道に出る此の間は山骨高く急勾配であるから急がずさわがずそろそろと下りるがよいと合力に注意されたが一步出せば三間も滑るので遂に急ぐ様になる止め様と思ふ時は寝るより外に仕方がない、一走り八合目まで降つた砂をはらひ草鞋をはきかへ腹ごしらへをして一寸足を休めた、弱つたものも餘程ある、その大方は頭痛がして嘔吐を催すのである、それから一路大砂走道を一蹴して直下五合目まで一息に摺り下つた途中ある時は雲に圍まれて一間先をゆく人さへ見えなかつた事もあつた、莫塵も衣服もしつぼり、髪や眉毛からぼたりと白露がこぼれて居た、しかし登山の苦しみに比ぶれば下山は眠つて居るも下りられる位雲をふみ風を卸して下界に降る思ひがある、天人のあま下りもかきやとおもはれた、五合目で砂をはらひ草鞋を取りかへまたすべるこれより以下樹林多く翠緑衣袂を染めんとする、薄黒い巖石と赭色の焦砂に目馴て草木の緑に飢ゑた目は此の樹林に入りて初めて蘇り爽快を覺えた、山酔ひをした連中も元氣を恢復した、一夕立の雲の一群が過ぎ去つた後は緑の色も一入濃く今を盛りと咲き亂れた、櫻

に鶯の聲を聞いた時は自然の妙美を嘆息せずには居られなかつた。

植物の種は登りの時のそれと殆んど變はりがない、目新しいものがあるとそれには遠慮もなく胴籠の中に葬つた、さきにとりし標本の不完全なものはこの下りでもとりかへることにした緑の間から淡紅色の頬を出して笑める石南をみては見捨てがたくていく度か草をわけて訪れ胴籠にも手にもあふるゝまで手折つた、採集も家づとも充分に出来たれば大得意になり濶歩して須走りについたのは午後六時すぎであつた、薄明りの路を馬に引かれて「ぎほ一し」の花咲く野原をすぎなつかしい富士に一揖して別れた、螢の飛んで居る田の中を通り御殿場についたのは八時を過ぎた頃であつた、富士登山もかくして終へたのである。

世 の 中 ローマ字と飛行機

電氣俱樂部茶話會の席上「ローマ字と飛行機」と題する談話の一節の大要下の如し。

諸君の中には「ローマ字と飛行機」と何の関係ありやと謂はるゝ人あらんも決して然らず。飛行機は工業の發達に待たざるべからず、工業の發達は又國字の便不便に